



I はじめに

1958年に出版されたフランスの地理学者ジャン・デルヴェール著『カンボジアの農民』は、いまだ半世紀前のカンボジアの自然環境と住民の生活を詳細に記述している。¹⁾デルヴェールは、地方の学校教師に宛てて配布した質問票への回答と、彼自身のグループが直接行った調査にもとづいて、この本を書いた。同書の出版以降、カンボジアでは、内戦と波尔・ポト政権による支配が起こった。しかし、大きな社会の変動によっても容易には失われることのない人々の生活の基層を伝える点で、同書の価値は今も色あせることがない。

ただし、デルヴェールがその本で対象としたのは、基本的に、メコン川のデルタとトンレサップ湖周辺の平地部の各地方であった。デルヴェールによると、1957年のカンボジアの人口は約460万人であり、うち90パーセントの人口は平地に住んでいた。すなわち、カンボジア北東部のベトナムとの国境地帯、タイ国境のドンラエク山脈へと連なる北西部の森林地帯、タイ湾に面したクロヴァーン山脈へ続く南西部一帯の山地は、あわせて国土の三分二の面積を占めながら、わずか30万人ほどの人口しかなかった。また、それらの地域には、カンボジア語以外の言葉を話す人々が多く住んでいた。そこでデルヴェールは、「カンボジアの農民」とは国土の30パーセントを占める平地部の人口稠密地帯に住む人々であると定義し、それ以外の地域について記述

社会の安定と無主地の消滅

小林 知*

しなかった。

本年2月26日から3月8日にかけて、上のような理由でデルヴェールが「カンボジアの農民」の土地とみなさなかつた地域をまとめて訪問した。筆者が2000年より調査を続けているトンレサップ湖東岸地域のコンポントム州の一農村は、デルヴェールがいう「カンボジアの農民」の居住地域のなかにある。カンボジア北西部、南西部、北東部の山地の訪問は、これまで平地の調査村を中心にカンボジアの社会について考えてきた筆者が、従来の見方を相対化し、この国と社会の全体像について理解を深める良い機会であった。

2週間弱の間に東のベトナムとの国境から西のタイとの国境まで駆けぬけた急ぎ足の訪問であったため、訪問した先々での見聞からいま引き出せるのは、スナップショットとしての印象が主である。しかし、そこでの幾つかの出会いは、平地の「カンボジアの農民」たちによる山地への移住という糸で繋ぐことができる。

II 森に頼って生きる

カンボジア北西部の経済の中心地は、アンコールワットの遺跡群で有名なシェムリアプである。シェムリアプの市街から、精巧で深くほられた彫刻で有名なバンテアイスレイ遺跡を越えて北上し、ウッドミアンチェイ州のオンロンヴェーン(Anlong Veng)を目指した。オンロンヴェーンは、1990年代末まで波尔・ポト派の強固な基地がおかれていたことで有名だが、低地であり、水田が開けている。ただし、そこへ至るには、プレイ・スアッ(Prey S'ah)と呼ばれる非常に深い常緑樹の森を横切る必要がある。そして、その森のなかの国道67号線沿いに、ひとつの開拓集落があった(写真1)。家屋の造りがみな新しく、歴史が浅い集落であることは遠目から分

* Kobayashi Satoru, 京都大学東南アジア研究所, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) デルヴェール, ジャン. 2002. 『カンボジアの農民 自然・社会・文化』石沢良昭(監修), 及川浩吉(訳). 東京: 風響社. (原著 1958)



写真1 森林を縦断する幹線道路沿いの集落

かった。また、家屋の周りに水田や畑がほとんどないことも気になった。

道沿いの雑貨店にお邪魔して、30代の男女に話を聞いた。それによると、この集落は、環境省が苗木栽培のステーションを作ろうとしたことから始まった。環境省が派遣した2家族が1998年前後にまずここに住み始め、その後、コンボンチャム州、コンボントム州、バットンバン州からその親類らが移ってきた。いまは30世帯まで増えた。オンロンヴェーンへ行く途中、この先には幾つか集落があるが、森林産物の採集だけで生計を立てているのは、この集落のみである。

採集する森林産物のうち最も重要なのは、カンボジア語でチューティアル (*Chhoe Teal: Dipterocarpus alatus*) と呼ぶダマルの樹脂である。樹脂は、船材の目止めや防腐剤として利用され、トンレサープ湖やメコン川の内水域のみならず、海岸部からも需要がある。仲買人は、シエムリアブだけでなく、タイにもいる。そして、携帯電話で注文を入れてくる。それを受けてから、一週間に一度、2～3日間森に入り、樹脂を集める。樹脂を採取するチューティアルの樹は、周囲が1.8～2メートルほ

どの大きさのものを選ぶ。早い者勝ちで、真っ先に印をつけた者が所有者となる。だいたい一人あたり50～70本の樹を所有している。古参者は集落の近場、新参者は森の奥に、所有する樹の分布域が分かれる。一本あたり500グラムほどの樹脂を一回で集めることができる。30リットルの量の樹脂に、2～4万リエルの値がつく。²⁾ 樹脂のほか、つる草や薬草の類も採集し、売ることがある。

最近、州の役人が来て、ここから立ち退くよういわれた。数キロ先のエリアに、立ち退き後の代替の屋敷地を用意しているという。しかし、まだ誰も従っていない。代替地は、国道から離れていて、生活に不便だ。国道沿いは、簡単に車をつかまえることができどこへ行くのにも便利だ。今のここでの生活に、まったく不満はない。

2) 換金率は4,000リエル＝1US\$であった。

III 森を開墾する

カンボジアの南西部の中心地は、バットアンバン州である。今回の調査では、バットアンバン州の州都から、タイ国境にある特別市パイリン（Pailin）との間を、一日かけて往復することができた。パイリンも、オンロンヴェーンと同じく、ボル・ポト派の主要な拠点のひとつであった。当時は、特に宝石と木材のタイへの輸出拠点として有名であった。

バットアンバン州の州都は、トンレサープ湖の洪水林に近い平地にある。そこから国道5号線を少し西へ進み、分岐点から国道57号線に入って、南下する。未舗装である上に乾燥が酷く、道沿いの立木や家屋が舞い上がる白色の土埃ですっかり覆われている。しばらく行くと、水田地帯にでる。バットアンバン州は、カンボジア国内でも有数のコメ所である。道路の脇に精米所を多くみかけるが、どれも他の地域のものより規模が大きい。40キロメートルほど南下すると、徐々に丘陵へ入り始める。マンゴー、バナナ、パパイヤ、トウモロコシなどが栽培されている。パイリンまで続く、黒色土壌の畑作地帯である。

丘陵地帯をすすむと、左右の森から立ち昇る白煙が目に入った。森に近づいてみようと、右手の山塊を目指して小道に入る。しかし500メートルほど進んだところで道が狭くなり、結局、車が立往生してしまう。降りて徒歩で先へ進む。畑は見事な黒土であり、短く切り整えられたキャッサバの茎が差し込まれていた（写真2）。

畑地のなかの小道で老夫婦に会い、聞き取りをした（写真3）。老夫婦はバットアンバンの市街の出身であった。土地なしで、廃品回収をなりわいとしていた。知人からこの土地を教えられ、6年前に移住し



写真3 バットアンバン出身の開拓農民



写真2 キャッサバの茎が挿された黒色土壌の畑地

てきた。まず、当時森だった土地5ヘクタールを村長から購入し、自分でも1ヘクタールの森を開墾した。土地の取引には、村長がサインした証書が添えられていた。2ヘクタールあたりの値段は、当時、2万バーツだった。移住した当時は、あたり一面が森で、二人がかりで抱えなければ手が届かない大木もあった。火を入れ、斧で伐採し、3年ほどかけて6ヘクタールの畑地を開墾した。うち3ヘクタールは、現在すでに末娘夫婦に分けあたえた。この道の少し先の集落に、3家族11人で住んでいる。5名いる子供のうち2名はバットンバン、1名はシエムリアップに住んでいる。集落には、コンボンチャーム州やシエムリアップ州から来た者もいる。

ここの土は、施肥の必要がない。いまは畑の一部にキャッサバを植えている。以前はゴマを植えたこともあるが、最近では、赤色の飼料用トウモロコシを栽培することが多い。2月と8月の二度播種し、栽培する。雨期の8月に播種した方がよく育ち、2ヘクタールから5〜12トンの収穫が期待できる。乾期作の出来は、雨次第である。昨年は、タイから来た業者に、キロあたり4.3バーツで売却した。畑の耕起は、ヘクタールあたり13万リエルでトラクターを雇って行く。播種は、一日8,000リエルで人を雇って行く。収穫も、出来高14キログラムあたり1,500リエル支払う約束で、人を雇う。労働者は、近辺の集落からも募るが、バットンバンの知り合いに頼んで集めてきてもらうこともできる。

最近では、この辺に土地を買いに来る者が増えた。土壌が良く、幹線道路に近いので、プランテーションの開発を計画する企業もやってくる。このすぐ先のキャッサバが植わっている畑は、昨年、自分たちと同じ時期に開拓者として移住してきた家族が企業に売ったものである。ヘクタールあたり1,500ドルの値がついたと聞く。ただし、自分たちの家族は土地を売る気が全くない。いま住む集落は水へのアクセスが悪く、乾期には幹線道路沿いまで水くみに出る必要があるなど、不便がある。しかし、ここに移住したおかげでスクーターが持てるまでになった。バットンバンの街で廃品回収をしていたら、このような生活にはとうていならなかった。

IV 投機する土地を求める

北東部のモンドルキリ州も、その北のラタナキリ州とともに、デルヴェールが「カンボジアの農民」の居住域としてみなさなかつた山地部である。モンドルキリ州は、ラタナキリ州よりも山地の面積が小さく、丘陵状の起伏がめだつ。また、なぜこのようになったのかよく分からないが、尾根上に樹木がなく、草地が発達している（写真4）。ベトナムの中部山地と接する同州には、ラタナキリ州と同じく、先住民が多く住む。また、森のなかの溪流や滝が景勝地として宣伝されるようになり、道が悪いのにもかかわらず、観光客が近年増えている。

モンドルキリ州を今回訪問したなかでもっとも印象深かったのは、ゲストハウスでの出会いだった。投宿して二日目の夕方、花壇に面したベンチで、555の銘柄のタバコを吸いながらたずむ初老の男性をみかけ、話しかけてみた。すると、内戦を逃れてオーストラリアへ渡った方だった。今はすでにリタイアしていて、悠々自適の日々を送っている。今回モンドルキリに来たのは、オーストラリアにいる子供たちのため、土地を買おうと思ったからである。ここの気候は涼しくて気に入っており、子供らが遊びに来る場所として良い。また、とりあえず土地を手に入れておいて、将来、子供らがプランテーションの経営を考えるのもよい。明日は、このゲストハウスの主人が紹介してくれる土地を見に行くつもりだが、その後もしばらく滞在する。気候が良いので、どうするかはゆっくり滞在しながら考える。

今回、同州の州都センモノロム（Sen Monorom）



写真4 モンドルキリ州の山地丘陵



写真5 カシューナッツが植えられた山地斜面, モンドルキリ州

で泊まったのは、実は、筆者が以前から調査を続けているコンポントム州の農村のホストファミリーの、次男が経営するゲストハウスだった。ホストファミリーの老夫婦には、全部で6名の子供がいる。その長男は、いまプノンベン農林水産省で働いているが、1990年代初めの一時期、モンドルキリ州の農林水産局に勤めていた。そして、センモノロムの近郊で土地を手に入れ、果樹のプランテーションの経営を始めた。次男と三男の世帯は、この長男に勧められて、1990年代後半にモンドルキリ州へ移住した。筆者が知り合った当初、ふたりはセンモノロムの市場で商売をしていた。そして3年ほど前から、市場での商売に加えて、ゲストハウスの経営も始め、遊びに来いとしきりに誘ってくれていた。しかし今回、念願の訪問が叶ってみると、三男は、ゲストハウスの経営を止めてしまっていた。すなわち、ゲストハウスとして建てた家屋を金融機関の出先事務所として貸し出し、自分自身は、州内の土地を広く歩いてみてまわり、希望者にその購入を仲介する商売を始めていた。筆者が滞在した二日間も、三男はラタナキリ州とモンドルキリ州の州境付近の土地を見にでかけたまま帰って来ず、会うことができなかった。

モンドルキリ州では、カンボジア語でプノン(Phnong)と呼ばれるモイ諸族の先住民の集落も訪問し、土地利用の変化について聞き取りをした。そ

のような村では、伝統的に陸稲を栽培してきた焼畑の斜面に、カシューナッツを植えるようになっていた(写真5)。ただし、さきの三男の一件を聞いてからは、住民の生業の変化以上に、それらの村々を訪問する道すがらですれ違う、ランドクルーザーやピックアップトラックのなかの人の方が気になった。その一部は、具体的な事業のアイデアがあるのでもなく、投機としての関心から土地を購入しようと考えている、平地からの来訪者に違いなかった。³⁾

V 社会の安定と無主地の消滅

カンボジアの山地部への筆者の関心は始まったばかりである。そのため、オムニバスの形で紹介した以上の各地の状況については、理解が十分でないところが多い。モンドルキリ州などの北東部の山地については、ゴム栽培などの仏領期以来のプランテーション開発の発展過程をよく踏まえるべきであるし、その他の地域についても、平地の「カンボジアの農民」による入植自体は今に始まったことではな

3) 近年、カンボジアの平地部では地価の高騰が急速に進み、投機的な土地取引が多くみられるようになっている(佐藤奈緒, 2007, 「カンボジアの土地集約化——格差拡大の要因とその現状」『アジア研ワールド・トレンド』No. 147: 34-37)。

い。

ただし、以上で紹介した出会いは、過去の社会の混乱からの回復を1990年代の10年間で急速に達成したカンボジアの国と社会が、今、その勢いのまま新たな変化を迎えていることを示唆していた。

カンボジアの人口は、1970年代後半に150万人以上という大量の死者をだしながら、1998年には1,143万人余、近年は1,400万人を超えた。平地の「カンボジアの農民」たちによる山地への移住は、このような人口増加を知る目には、当然の帰結と映る部分がある。ただし、平地の人々が山地へと向かい、その土地の自然や先住者の生活に新たな影響を及ぼしつつある様子には、紹介した三つの事例が示すように、幾つかのパターンがある。そして、その潮流の全体を根底で支えているのは、社会の安定というごく基本的な事実である。

カンボジアの山地における森林破壊は、ボル・ポト派らが1980年代に行った輸出目的の木材の大量伐採のように、不安定な社会状況下でも進んできた。しかし、今日のカンボジアの山地の世界では、生活のためという個人レベルの選択肢としての移住から、地理的な障壁を越えた情報ネットワークの発達を前提とした投機事業の発展までの幅広い動きが一気に拡大しており、これまで地元住民にあまり関心をもたれてこなかったエリアの森林も、生産活動とは別の視点から外部者によって価値を付与されてようとしている。今回の調査では、幹線道路に沿った部分しか踏査できなかったせいか、森を焼く白煙は、開拓者による個人レベルのものしかみいだせなかった。しかし、コンセッションを後ろ盾とした企業や軍人による大規模な土地占有にもとづく森林破壊がカンボジアで多くみられることは、よく知られた事実である。

他方、カンボジアの国土の周縁部を占める山地で進行する以上のような動きは、開拓移住や土地の占

有をめぐる制度の重層性を念頭に理解する必要がある。紛争解決のため、国連という外部勢力が介入したことで国家がつくられた今日のカンボジアの場合、諸外国からの指導のもとで中央政府が進めようとしてきた「近代的」な制度整備と、コミュニティのレベルで実際的な問題に対処するうちに整えられてきたローカルな慣例との間の乖離に注目する視点は、欠かすことができない。生活のために山地へ移住した平地の農民たちの多くは、地元の行政責任者から保障を得ることで、土地占有の事実を有効なものとしていた。一方で、投機的な関心をもとに山地へ向かう人々は、地元にはではなく、中央からの制度的な支えにもとづき行動を正当化することができる。

近い将来、その両者の間にコンフリクトが生じることは目に見えている。それは、国内の各政治勢力と国際社会の妥協の産物として15年前に生まれたカンボジアの政府が、いわゆる近代的な性格の国家としての装いを整え、その実行力をローカルレベルにまで行き渡らせ始めたことを意味する。平地と山地、国家とコミュニティが各様の現実生活の基盤を求めることが許されていた時代は、終わりを迎えようとしている。

最近、グローバル化という言葉に耳にする機会が多い。そのとき、我々はとかく、均一で一方的な社会の変化を想像しがちである。しかしその現場は、情報の流れだけではなく、生身の人々の具体的な営みが特徴づけている。

以上で紹介した山地へと向かう「カンボジアの農民」たちの諸相は、今日のカンボジアの国と社会の特徴的な性格をうきぼりにすると同時に、グローバル化という言葉で語られるところの現代世界のリアリティを、我々が我々自身のものとして再認識するためのきっかけを与えているように思う。